

教育長だより

No. 20

2022年9月28日

コロナ禍での寄りそい

～ 『生きづらさ』が見えるとき～

ここ3年近い「コロナ禍」は、校園所のみなさんの教育・保育活動に大きな影響を与えてきました。とりわけ、重い課題をかかえている子どもたちの支援には一層厳しいものがあつたと思います。みなさんのご尽力に改めて敬意を表します。

さて、私は中学校教員でしたので、子どもたちの成長や仲間と共に困難を乗り越えていく姿に大きな感動を覚えたものです。そんな中、問題行動を繰り返す生徒とも関わってきました。その一つを紹介します。

転勤直後、久しぶりに「学校一のやんちゃな3年生」を社会科の授業で持ちました。残念ながら私の授業中は寝てばかり。思い出したのは、前任校での研修です。先生の生徒にかける『まなざし』の大切さを校内研修で大学の先生（元大阪市大教授(教育学)：豊田ひさきさん）から教えてもらいました。「今日は、1分だけ顔を上げてこっちを見てくれた。ようし！ 明日は3分に延ばすぞ！」私は定期テストの勉強にことつけて何回かその生徒宅を訪問しました。初めて訪れた時、そこから見えてきたのは、その子なりの『生きづらさ』です。中1の5月までは社会科の授業のノートを丁寧に書いていました。きっちりとした文字で、この子の性格が見えてきました。しかし、その月の後半から文字の量は半分くらいになり、文字自体も次第に乱雑になっていきました。そして、7月以降は真っ白。聞いてみると、「オレ、字書くの遅いのに、次から次へと先生が（黒板に）書くから、（自分が書く前に消されて）写せんようになってしまった。」とのこと。こうして几帳面な彼は（授業に）ついていくことができなくなっていったようです。また、そのノートに反比例するかのよう問題行動が出てきていました。私は彼の中1のノートから、彼がどれだけしんどい思いをしながらここ（中3）まで授業を受けてきたのかが見えたような気がしました。そして、授業についていけていたら、彼の人生はもっと違ったものになっていただろうとも思いました。私は以降半年余り、担任外ではありましたが微力ながら彼への「寄りそい」を繰り返しました。

昨年9月の『保護司だより』39号に藤田博さん（大津保護観察所長）の『生きづらさについて考える』という文章が載っていました。（裏面参照ください。）私はこれを拝読して、先の中学生を思い出していました。学校での「寄りそい」は、保護司のみなさんの更生保護活動にはとても及びませんが、まずは子どもたちやその保護者さんの「生きづらさ」を理解することからだと思います。コロナ禍ではありますが、人と人のつながりから明るい社会が生まれるものだということ、そして、校園で働く私たちだからこそできる教育活動があると信じています。